

ガルシアの魅力

本来2020年に行われる予定であったがコロナ禍により1年延期し、さらにはライブ配信もされたことにより過去最高の注目を浴びた今回のショパン・コンクールで、日本人2名の素晴らしいパフォーマンスと並び、ここ日本でも特に話題になったのが、スペイン生まれの若きヴィルトゥオーゾ、マルティン・ガルシア・ガルシアである。ピアノを弾くことを心から楽しむ様子を、この究極とも言えるコンクールで発揮できる彼の才能に、多くのファンが惹きつけられた。

このピアニストの特徴のひとつは、そんな豊か過ぎる表情(時に本人が歌ってしまうほど!)の裏にある、極めて安定したテクニックだろう。国際コンクール上位入賞者ともなれば技術が高いのは当たり前ではあるが、ガルシア・ガルシアの鍵盤に手が張り付いたような、芯のある技術はそうそう見られるものではない。一聴すると破天荒に聴こえるその音楽も、極めて高い技術、丁寧なタッチにより美しく束ねられている。その水準は、ため息が出るほどだ。

マルティン・ガルシア・ガルシア (ピアノ)

Martín García García (Piano)

マルティン・ガルシア・ガルシアはスペイン、ヒホン生まれのピアニスト。5歳からピアノを始め、ナタリア・マズーンとイリヤ・ゴルdfaーブの元で学ぶ。レーナ・ソフィア音楽学校を卒業、ソフィア女王から最優秀学生賞を受ける。彼はまたニューヨークのマネス音楽院の修士号も取得している。マルティンは、いくつかの国内、国際コンクールで第1位を獲得、ハイライトは2021年クリーブランド国際ピアノコンクールで優勝、そして世界最高峰のピアノコンクール、第18回ショパン・コンクールでは第3位と最優秀協奏曲特別賞を受賞する。2018年ニューヨークで開催された国際キーボード・インスティチュート&フェスティバルで第1位を獲得、同時にそこでの奨学金を得ることになる。現在、彼はヨーロッパ、アメリカでコンサートを開催、ウラジミール・クライネフ、ドミトリー・アレクセーエフ、アルカーディ・ヴォロドス、ディミトリ・バシキロフ、ホアキン・アチューカロ、タチアナ・コープランド(セルゲイ・ラフマニノフの姪)などの音楽家から非常に高い評価を受けている。2021年10月ワルシャワで開催されたショパン・コンクールで成功をおさめたガルシアは、日本、ヨーロッパ、アメリカでコンサートツアーや予定されている。彼は現在、ニューヨーク在住。著名なピアニスト、ジェローム・ローズに師事している。

北原幸男 (指揮)

Yukio Kitahara (Conductor)

桐朋学園大学卒業後、インスブルック・チロル歌劇場専任指揮者、ドイツ・アーヘン市立歌劇場音楽総監督を歴任。国内でもNHK交響楽団、新国立劇場などを指揮し高い評価を得ている。グローバル音楽奨励賞、下總院一音楽賞受賞。現在、宮内庁楽部洋楽指揮者、武蔵野音楽大学教授、埼玉県富士見市文化芸術アドバイザー。公式ホームページ <https://www.yukio-kitahara.com/>



東京21世紀管弦楽団

Tokyo 21c Philharmonic

音楽を通して、多くの人たちと手を携え、今までの固定観念にとらわれない新しい時代の「楽しいオーケストラ」を目指して、演奏活動を進めていくオーケストラ。これまでに2019年オスカー新人賞を受賞したテノールのステファン・ポップの日本公演、オペラ界のビッグ・スター、テノールのファン・ディエゴ・フローレスの日本公演に出演し、好評を博した。浮ヶ谷孝夫(ブランデンブルク国立管弦楽団フランクフルトで首席客演指揮者)を音楽監督に迎え、2020年度は東京芸術劇場でベートーヴェンやブラームスといった重厚なドイツ音楽で定期演奏会を行い高評を博した。このほかバレエ、ポップスにも出演するなど活動の場を広げている。



FAZIOLI

過去に目を向け
現在に集中し
未来を夢見る

ファツィオリジャパン株式会社
www.fazioli.co.jp

